

歴史コラム①

第3回大会の写真

在日大韓基督教教会(KCCJ)は、一九九八年に宣教九〇周年を祝った。それに先立つ一九九五年には、歴史編纂特別委員会(現・歴史編纂委員会)が組織され、歴史編纂作業を担うこととなった。この委員会の活動を通して、徐々にではあるが、KCCJ内にその歴史に対する関心が高まってきているように思われる。そこで今月号より、より多くの方々にKCCJの歴史の一場面に近づいていただきたく、本コラムを開始することとした。一枚の写真や歴史的な文書を通して、KCCJの先達の想いをお届けする。(編集部)



朝鮮基督教大会第三回總會記念撮影
一九三八年五月五日

在日大韓基督教教会(KCCJ)の歴史編纂委員会として、現在の歴史編纂委員会が設置されたのは一九九五年のことである。早速、資料が大阪のKCCJに置かれて、KCCJに関する資料が本格的に収集されること

となった。収集にまつわる話としては後日に譲るとして、残念なことには未だKCCJ内からの資料はごく限られたものとなっている。一年半前のある日、同志社大学人文科学研究所でお世話になっている土肥昭夫名誉教授からKCCJの事柄に関する問い合わせのハガキが送られてきた。問い合わせの内容は、(在日大韓基督教教会(一九三四年二月創立)が日本基督教教会へ「合同もしくは協調」の申し入れを決定した第三回大会は、「いつ、どこで」開催されたのか、また、その資料を提示していただきたというものであった。この問い合わせは、最近、同志社大学神学部大学院の学生の中に「在日大韓基督教教会の歴史」に関心をもち、卒業論文のテーマにする人たちが現れたことにも関係していると思われる。(在日大韓基督教教会の定期大会と一回の臨時大会が開催されたのが、残念なことには一回目と二回目を除いて会議録が保管されていない。従来、第三回大会は特高資料(一九四〇年報告)をもとに、一九三七年五月に大阪で開催されたと解釈されてきた。しかし、事実は一九三八年五月五日であった。このことを私たちに示してくれたいのは、ここに掲載した、たった一枚の写真であった。写真には場所について、説明が付いていないが、明らかに講壇の枠組みの特徵からして、かつてJR鶴橋駅近くの大成通りにあった大阪東部教会(現・大阪教会)の礼拝堂である。

このように、すでに一人歩きをしまっている事柄を、より正しく位置付けるべく出てくることには、在日大韓基督教教会の歴史を学ぶものとしての喜びの一つである。私たちの教会が、日本基督教教会に「合同」という名のもとで「吸収」され、結果として教派としては解体を余儀なくされることになったのか、この時期の一年のズレはすいぶん大きな意味をもつのである。

※私たちの教会に、特に戦前の写真や会議録などの資料をお持ちの方は、歴史編纂委員会(〒五五四一〇〇三三 大阪市生野区中川西二一六―一〇 KCCJ内) 電話:〇六―六七三二―六八〇二へお知らせ下さい。

休刊のお知らせ
十月号を休刊致します。

ぶどう園の労働者

―マタイ福音書20章1節～16節―

韓 聖 炫 牧師 (西新井教会)

説教



「ぶどう園の労働者」のたとえ話は、よく読むと常識破りのことがあふれています。まず、ぶどうを収穫する労働者を雇うために、ぶどう園の主人自らが夜明けから出かけたというのには普通ではありません。それも引き続き、九時、十二時、午後三時、そして夕方に近い五時の計五回にわたって働き手を探しました。さらに、収穫の仕事が終わろうとする時刻になっても出かけて行き、失業者を雇ったという行為も普通の常識では理解が苦しみま



す。それほど切羽詰った意表をつくものでした。「友よ、あなたに不当なことをしていない。あなたはわたしの「デナリオン」の約束をしたではないか。自分の分を受け取って帰るなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ」最後の者に対する主人の特別な関心が感じられる。ぶどう園の主人は「わたしの気前のよさをねたむのか」とささ言います。直訳すると「わたしが気前がよいので、あなたの目が悪いのか」となります。早朝から働いた者は、夕方五時から働いた者も「デナリオン」をもらったのを見て、欲をふくらませ、目が悪くなり、物がよく見えないのではと答えているのです。もし、見る目を持っているのなら、雇用というのは実は神の贈り物であることに気が

づくだろう、それが見えないのかと詰っているのです。ぶどう園の主人は、私たちの住み慣れている世界や社会における価値観、考え方を根本から覆しているのです。このぶどう園の主人とは勿論、神のことです。神ご自身が救いのために人間を探しておられるのです。このことを深く私たちが心に留めなければなりません。

ぶどう園の主人の度重なる求人活動には、実は別の目的があったのです。主人は「何もしないで立っている人」(20:3、4、6、7)をぶどう園に繰り返し送り込んでいくのです。何と云ったのは、雇用(労働)が神からの贈り物であることとを強調するためでした。私たち現代人を含め、早朝から働き不平をこぼしている人は、雇用を労働の契約

によって受け継がれます(19:29)。神にのみ頼りきって生きる者は、自分が神の贈り物や恵みによって生かされていることに気づき、感謝する人々です。このような人々が天の国を受け継ぐのにふさわしいのです。一デナリオンは一日を生きたための生命の価です。生命の価に、人種、民族、性別、成人や子ども間の差異があつてはなりません。ですから「この最後の者にも」一デナリオンは与えられねばなりません。人権とは日々の「デナリオン」そのものです。人権とはすべての人に与えられた神からの贈り物なのです。

私たちが在日にとつては、ニューカマーの韓国人たちや他の多くの外国人移住労働者とその家族たちが最後に来た者に相当します。在日大韓基督教教会は、この日本に最後に来た者である外国人移住労働者の人権のために、また在日の人権擁護のために、日本の諸教会と『外国人住民基本法』(一九九八年)を作りました。神の贈り物である「デナリオン」の恵みのすばらしさを共に分かち合うためにです。ぶどう園という神の共同体を共に創るためにです。この制定のために全教会が努力しましょう。

장터

韓国食品・書籍・CD・ビデオ

(株)韓国広場

新宿店: 東京都新宿区大久保1-17-7
TEL (03) 3232-5400
FAX (03) 3200-2949

代表取締役 金根熙

不動産業務全般

免許番号・愛知県知事③第5426番

太栄企業株式会社

代表取締役 金光洙
(名古屋教会 長老)

事務所 名古屋市熱田区川並町2番21号
(名古屋市中央卸売市場入口南側太栄ビル)
電話 052(682)1177(代)
自宅 名古屋市千種区御影町2-55-5

株式会社 ニューキング
有限会社 三愛

取締役社長 李鍾善
(名古屋教会 長老)

ニューキング 四日市市野田1丁目965-1
TEL (0593) 31-4771(代)
三愛 岡崎市大和町字荒田14-1
TEL (0564) 31-8893(代)

全協、殷俊一氏を 韓国インターン派遣

今年六月より、青年会全国協議会(全協)のメンバーである殷俊一氏(平野教会)が、韓国基督教青年協議会(EYCK)へのインターンとして韓国に十ヶ月の予定で派遣された。このプログラムは、EYCKと全協、NCC関西青年協議会の三者で運営されており、エキメニカル青年リーダーの育成などを目的としたものである。

同プログラムでは、一九九九年から、EYCKより延商連氏(二〇〇一年八月に帰国)を日本側が受け

入れ、在日大韓基督教教会などがその受け入れを財政的に支援した。今回の殷俊一氏の韓国派遣は、そのプログラムの第二弾として計画・実行されたものである。「僕がこれから青年会活動をしていく上で、リーダーシップが能力的にも精神的にも不足している」と思ったので、韓国で自分不足しているこれらのことを身につけてきたい」と抱負を語る殷俊一氏に、在日・韓・日の相互理解を促進するための人材に成長す



教案に名前を付けてください!

15年も経過した私たちの教案は、ずっと「教会学校シリーズ」という名で発行されてきました。日本基督教団の教案は『教師の友』、日本バプテスト連盟の教案は『聖書教育』等、それぞれの教団・教派の教案には名前があって、親しまれてきています。第Vサイクルに入る2002年度からは、新たな出発として名前を付けたいと計画しています。よいアイデアがありましたら、ぜひお知らせ下さい。

教育主事 呉 寿 恵

●×切: 10月末

●応募してく下さった方には記念品を、採用された方には賞品をお出しします。よろしくお願いします。

<応募先> 〒544-0032 大阪市生野区中川西2-6-10 KCC内

宣教奉仕委員会教育部

電話: 06-6731-6801 FAX: 06-6718-0988

06-6971-5848 (夜間)

聖ルカ歯科医院

平日: 午前9時~午後1時、午後3時~午後7時

土曜: 午前9時~正午

休診: 火曜日、日曜日、祝日

診療科目: 一般歯科、小児歯科

*留学生は特別優待します。

院長 関 彬 夫 (東京日暮里教会執事)

東京都墨田区太平3-8-2 東和ビル1F

TEL 03-5819-8257

FAX 03-5819-8267

JR錦糸町駅北口徒歩5分

CORAL WATER (珊瑚の水)

ミネラルウォーター、カルシウム

冷温水機直輸入

冷温水をワンタッチで便利に。

(有) I.C.C. 東京

代表 表 京 先

(東京ベテスタ教会 執事)

〒123-0845 東京都足立区西新井本町5-4-9

TEL 03-3880-3159 FAX 03-3880-4404

愛三グループ

愛三産業株式会社 済州カントリー倶楽部

代表取締役会長 白 昌 鎬

代表取締役社長 白 一 善

本社 東京都墨田区江東橋4-6-4 TEL (03) 3633-7477(代)

済州C・C 韓国済州市寧坪洞2238-2 TEL (064) 702-0451(代)

ソウル事務所 韓国ソウル特別市鍾路区内需洞167 TEL (02) 739-3327(代)

難キ連全国フォーラム

在日韓国基督教教会館で開催

八月十日から十一日にかけて、「二〇〇一年度難民・移住労働者問題キリスト教連絡協議会全国フォーラム」が、大阪の在日韓国基督教教会館(KCC)で開催された。参加者は四十三名(在日大韓基督教教会関係者四名)であった。

「隣人」として生きるために「ボーダレス時代」としてメッセージを行った。合田牧師によるメッセージは、入管法を見る視点で聖書を読み解くものであった。例えば、イエスのエジプト避難は政治的難民としての移動と捉え得るという。ヨハネ四章にあるように、イエスが、当時ユダヤからもガリラヤからも嫌われていたサマリアをわざわざ通ったのは、差別され阻害されている民族を救うためであった。このことは、教会が外国人問題に関わる根拠にもつながる。差別され、疎外されている人がいるなら、イエスがサマリアの人たちにしたように、教会もその人たちに関わらねばならないというのが合田牧師のメッセージの中心主題であった。

礼拝後、金成元氏(KCC幹事・韓国法律支援センター事務局長)、ビスカル氏(カトリック大阪

教区難民移住移動委員会難民デスク)、青木理恵子氏(京都YWCA・APT)の三者から発題を受けた。「韓国人法律支援センターの取り組み」と題した金氏による発題では、救援センターの働きと、最近の相談の特徴について述べられた。弱い立場に置かれて

いる滞日韓国人労働者をめぐる労災やブローカーによるビンハネの問題、入管の対応の問題などが挙げられた。あるオースティン人は、子どもを連れて在留許可申請のため入管に行つたところ、入管職員に「子どもを産んだら在留許可に有利になると思つて犬みたいにはこ産みやがって」と侮辱されたことなどが報告された。

「アフガン難民の実情と支援」と題して発題をしたビスカル氏は、一九九九年末頃からかわつて

いるアフガン難民のケース報告があつた。内戦中のアフガニスタンでは、現在、国土の大半を掌握しているイスラム原理主義勢力のタリバン政権による他民族・他宗教への迫害が起つて

いる。日本に来るアフガニスタン人の多くは、タリバンによる迫害または家族の虐殺を経験しており、それが彼ら彼女らのトラウマになっているという。発題の中で、難民申請を行つて

る二名のアフガニスタン人から、日本の難民制度の問題点の指摘や、申請への協力、平和に暮らしたいという思いが切実に訴えられた。

青木氏が行った発題では、日本人と結婚した外国人女性たちが置かれている家庭内暴力や精神的いじめの問題、外国人の立場で患者を受け止める医師がいな

いといった精神医療の問題点などについて触れられた。また、NGO団体が自分たちの持つ持っているリソースを把握し、他のリソースを持つている団体と役割分担をしながら一緒に活動していくべきことが主張された。そして、発題の中で、日本人と結婚したフィリピン女性から、教会がもっと外国人に対してその門を開くべきことが訴えられた。

二日目に終わった全体協議では、前日までに行われ

た発題などの感想や、フォーラムへの期待について共有した。その中で、教会が外国人支援をいかに自分たちの宣教の課題とするかが重要であることや、NGOがケースを抱えるので

はなく、行政とNGOの連携を育てなければならぬなどの意見が出た。

全体協議後、閉会祈禱をもつてフォーラムを終えた。韓国から多くの移住労働者が来ている現状があ

る。移住労働者・難民を取り巻く問題は、私たちが在日大韓基督教教会が真摯に取り組まなければならない宣教課題の一つではなからうか。

(報告: 李相勳幹事)

北米長老教会ユース
トライエニアムが開催

二〇〇一年七月二十四日から二十九日まで、アメリカ・インディアナ州にあるパドゥー大学で「二〇〇一長老派ユース・トライエニアム」(北米長老派系四教団主催)が開催された。これは、北米の各地から長老派教会のユース(主に高校生)が集まる三年に一度の夏期青年大会である。在日大韓基督教教会からは、朴重紀子(大阪西成)と高誠(東京)が参加した。

青年大会前には、ホームステイ・プログラムがあつた。朴重紀子は、七月十三日から二十日まで、デトロイト郊外の長老派教会の教会員宅に滞在した。その後、インディアナ州に移動し、本大会前に海外から

海外からの長老派および改革派の青年たちは、「グローバル・パートナー」という資格で招待され、自国の文化披露や課題のシェアを通して、北米からの参加者たちとの交流を行つた。

青年大会では、「在日」という特殊な存在は簡単には理解されなかったが、スピーチや歌を通して交流を図る中、「在日」の存在と歴史に感動したとの感想をも

らうこともあつた。今回の青年大会に関する詳しい報告は、後日、再行予定である。

(報告: 朴重紀子)

第49回 全協夏期修養会開催

主題「変化し、成長する青年の場として」



八月十三日から十六日まで、第四十九回全国青年夏期修養会(主催:青年会全国協議会、後援:信徒委員会)が、美しい自然に包まれた長野県・野尻湖レイクハウスにて、四十四名の参加者のもと開催された。

初日は、まず参加者がお互いに打ち解け合うためのプログラムとしてスポーツ大会が行われ、共に汗を流した。その後、李相勲伝道師(総会幹事)より「孤独・絶望を越えるために」(創18:32)という題目でメッセージを受け、開会礼拝が捧げられた。四日間のプログラムの始まりにあたり、この動と静のプログラムによって、修養会が主の交わりにある仲間たちと共に

話し、差異を認めつつも境界線を越えていくところに在日大韓基督教会の「真に渴望する共同体の姿」があるのではないかと述べた。そして、この歩みに伴う重荷は、主イエスによってもたらされる安らぎと仲間への信頼によって解放されていくものだと思えてくる。

二日目は、「自分の足場の掘り下げ」の営みとして、午前中にまず自分自身の「在日性」・「韓国人性」・「日本人性」を考察するためのアンケートに各自答え、これをもとにした分団ワークでは、お互いの考えや経験に耳を傾けた。再び自分自身について見つめ直す契機となったのではないだろうか。そうした個々人のアイデンティティに関わる問題を掘り下げていく一方で、よりマクロな視点から日本社会と「在日」の現状をとらえていく意味で、

夜の「歴史講演」へと移っていった。歴史講演は、講師に鄭映惠氏(大妻女子大教員)を迎え、「歴史を自らのものとするために」というタイトルで話していただいた。在日二・五世として生まれ育った鄭映惠氏は、青年時代に韓国を訪れたことがきっかけで、自身の存在とルーツの歴史の意味を実感し、矛盾を抱える自己の存在理由に苦しまれた。それは同時に、個人史と歴史との接点の発見であり、歴史を「自己」ととらえる座標軸として認識する契機ともなった。しかし、現在の

「新しい歴史教科書」や靖国公式参拝などの問題による歴史の歪曲・抹消は、正しい自己認識を可能にせず、自己否定に仕向け、歴史の共有から生まれる相互理解や信頼を損なうと変えるものだと言った。また日本人の中に加害者としての立場から、在日大韓基督教会が牧会を続ける中で、思いや苦勞を率直に語った。特に、人を受け入れることの難しさと同時に、正しく自分を受け入れられないことの痛みについて語られ、そこに慰めと愛の共同体としての教会の働きがあると述べた。「自己」を受けとめ、新たな歴史を創造していくための糸口を深く考えさせられた。

この日はまた、「遊び」のプログラムとして、サムルノリ班と合唱班(四バート)に分かれて韓国朝鮮の伝統的民族文化に触れる有意義な時間をもつことができた。

三日目は、午前中の「聖書講演」に中江洋一牧師(折尾)を講師として迎え、「在日性を問う(本日の自分と出会う)」というテーマで話していただいた。中江牧師は、日本人として客観的に「在日」を見るという立場から、在日大韓基督教会が牧会を続ける中で、思いや苦勞を率直に語った。特に、人を受け入れることの難しさと同時に、正しく自分を受け入れられないことの痛みについて語られ、そこに慰めと愛の共同体としての教会の働きがあると述べた。「自己」を受けとめ、新たな歴史を創造していくための糸口を深く考えさせられた。

夕方には、八・五(パトリオ)を共に覚えた。今年は、自分にとってのバリロを真剣に考えるプログラムが準備された。壁には、戦争に傷つく朝鮮民族や従軍慰安婦、在日、日本人の姿が、またその時代と共にあった在日大韓教会の姿が、そして未来を担う在日、ダブル、日本人の子どもの姿が、「過去・現在・未来」をテーマにプロジェクターで次々と映し出された。あまりにも過酷な映像に目を塞ぎたくなる場面もあった中で、歴史を自分とつなげ、現実の歴史を直視していく歩みによってこそ未来が拓かれるという思いが強くもたらされた。

全国高校生夏期学校開く

2年ぶりに開催、新たな出発図る

八月十三日から十六日にかけての三泊四日間、長野県野尻湖にて、二年ぶりの「全国高校生夏期学校」がもたれた。

昨年からの担当が宣教師委員会の中の教育委員会ということになったが、残念ながら昨年度は開催することができなかった。今年度は青年会からの暖かいアプローチがあったおかげで、意義ある夏期学校を持つことができたことを心より感謝している。

青年修養会と日程をまったく同じくし、場所は青年会にある野尻湖レイクハウスにて、四十四名の参加者のもと開催された。

初日は、まず参加者がお互いに打ち解け合うためのプログラムとしてスポーツ大会が行われ、共に汗を流した。その後、李相勲伝道師(総会幹事)より「孤独・絶望を越えるために」(創18:32)という題目でメッセージを受け、開会礼拝が捧げられた。四日間のプログラムの始まりにあたり、この動と静のプログラムによって、修養会が主の交わりにある仲間たちと共に

話し、差異を認めつつも境界線を越えていくところに在日大韓基督教会の「真に渴望する共同体の姿」があるのではないかと述べた。そして、この歩みに伴う重荷は、主イエスによってもたらされる安らぎと仲間への信頼によって解放されていくものだと思えてくる。

二日目は、「自分の足場の掘り下げ」の営みとして、午前中にまず自分自身の「在日性」・「韓国人性」・「日本人性」を考察するためのアンケートに各自答え、これをもとにした分団ワークでは、お互いの考えや経験に耳を傾けた。再び自分自身について見つめ直す契機となったのではないだろうか。そうした個々人のアイデンティティに関わる問題を掘り下げていく一方で、よりマクロな視点から日本社会と「在日」の現状をとらえていく意味で、

夜の「歴史講演」へと移っていった。歴史講演は、講師に鄭映惠氏(大妻女子大教員)を迎え、「歴史を自らのものとするために」というタイトルで話していただいた。在日二・五世として生まれ育った鄭映惠氏は、青年時代に韓国を訪れたことがきっかけで、自身の存在とルーツの歴史の意味を実感し、矛盾を抱える自己の存在理由に苦しまれた。それは同時に、個人史と歴史との接点の発見であり、歴史を「自己」ととらえる座標軸として認識する契機ともなった。しかし、現在の

「新しい歴史教科書」や靖国公式参拝などの問題による歴史の歪曲・抹消は、正しい自己認識を可能にせず、自己否定に仕向け、歴史の共有から生まれる相互理解や信頼を損なうと変えるものだと言った。また日本人の中に加害者としての立場から、在日大韓基督教会が牧会を続ける中で、思いや苦勞を率直に語った。特に、人を受け入れることの難しさと同時に、正しく自分を受け入れられないことの痛みについて語られ、そこに慰めと愛の共同体としての教会の働きがあると述べた。「自己」を受けとめ、新たな歴史を創造していくための糸口を深く考えさせられた。

この日はまた、「遊び」のプログラムとして、サムルノリ班と合唱班(四バート)に分かれて韓国朝鮮の伝統的民族文化に触れる有意義な時間をもつことができた。

三日目は、午前中の「聖書講演」に中江洋一牧師(折尾)を講師として迎え、「在日性を問う(本日の自分と出会う)」というテーマで話していただいた。中江牧師は、日本人として客観的に「在日」を見るという立場から、在日大韓基督教会が牧会を続ける中で、思いや苦勞を率直に語った。特に、人を受け入れることの難しさと同時に、正しく自分を受け入れられないことの痛みについて語られ、そこに慰めと愛の共同体としての教会の働きがあると述べた。「自己」を受けとめ、新たな歴史を創造していくための糸口を深く考えさせられた。

夕方には、八・五(パトリオ)を共に覚えた。今年は、自分にとってのバリロを真剣に考えるプログラムが準備された。壁には、戦争に傷つく朝鮮民族や従軍慰安婦、在日、日本人の姿が、またその時代と共にあった在日大韓教会の姿が、そして未来を担う在日、ダブル、日本人の子どもの姿が、「過去・現在・未来」をテーマにプロジェクターで次々と映し出された。あまりにも過酷な映像に目を塞ぎたくなる場面もあった中で、歴史を自分とつなげ、現実の歴史を直視していく歩みによってこそ未来が拓かれるという思いが強くもたらされた。



全国高校生夏期学校感想文 夏期学校を振り返って

金 聡 美 (横浜教会)

最初は十二時間、車に揺られて来たので元気がありませんでした。食欲もなかったし、一日目のブログ

の傷を癒せずにいる現実にも言及しつつ、そうした私たちの深い心の傷を癒すには、矛盾と混沌を含む自分自身の感情を語ること、他者と自分への語りこそがアイデンティティの枠を越え、自分らしい生を可能にするということが強調された。また、講演の冒頭で、青年たちが四つの聖書箇所を寸劇で表現したが、聖書に自分を登場させることで、御言葉に照らし合わせた自分自身の姿にリアリティをもたせることができ、それまでの分団や講演を通して深めてきたそれぞれの「立場性」に立った信仰や、また在日大韓基督教会に集う意味について考えることができた。

午後は、「性の多様性」学習会がもたれた。はじめに全協として、同性愛者に対する差別をきつかけに、これまで活動し学んできたことが伝えられた。その後、

ビデオ「マイ・セクシャリティ」私の好きな性別」上映とアンケートを行った。この学習会では、多様な性に生きる人々の現実を自分が知ることで、自身のセクシュアリティを改めて考えてみることに目標が置かれた。自分の経験を踏まえた感想や進め方に対する意見など、今後につながる意見も交わされた。

夕方には、八・五(パトリオ)を共に覚えた。今年は、自分にとってのバリロを真剣に考えるプログラムが準備された。壁には、戦争に傷つく朝鮮民族や従軍慰安婦、在日、日本人の姿が、またその時代と共にあった在日大韓教会の姿が、そして未来を担う在日、ダブル、日本人の子どもの姿が、「過去・現在・未来」をテーマにプロジェクターで次々と映し出された。あまりにも過酷な映像に目を塞ぎたくなる場面もあった中で、歴史を自分とつなげ、現実の歴史を直視していく歩みによってこそ未来が拓かれるという思いが強くもたらされた。

ラムが全然、参加できなかったのが、すごく残念でした。でもそんな気分もふつとぼろぼろと夜寝るだけ騒ぎまわりました。残りのメンバーともすごく仲良くなって、友だちのキヨッポが一気に増えたのですごく嬉しかったです。こういう貴重な時間は本当にめったにないものだと思います。

一つ残念だったのが、私が韓国語がしゃべれないがために、あまり話すことが出来なかった人が二人いたことです。でも、これを機に韓国語をもっと頑張ろうと思えました。来年はもっとしゃべっちゃおうぞ!

最後に、毎晩 私たちを楽しませる企画をしてくれた青年の皆さん、本当にありがとうございました。そして最後は生前にマツキントツシユ牧師が愛した賛美歌の一つである四八七番を共に讃美し、しばらく黙祷を捧げた。短い時間ではあったが、私たち青年にとっても特に親しい存在であったマツキントツシユ牧師への思いを深め、追悼した。

最終日の「分かち合い」では、四日間を思い思いに振り返った。中でも若い世代からの勇気ある意見は有意義で、互いに心を開きあう話し合いができた。

そして閉幕の時を迎えた。信徒委員長の金性済牧師(川崎)によるメッセージと祝福で閉会礼拝が行われた。生きる上で苦難や「孤独・絶望」に遭遇しても、私たちは、キリストの福音(それは「蝶の舌」)につく花の蜜のようなものによって、再び喜びの絆に呼び戻される希望が与えられていることが示された。

今年度はステップに、来年度は更に飛躍できるよう努力したい(下段に参加高校生による感想文を掲載)

(報告: 呉寿恵教育主事)

金 聡 美 (横浜教会)

最初は十二時間、車に揺られて来たので元気がありませんでした。食欲もなかったし、一日目のブログ

の傷を癒せずにいる現実にも言及しつつ、そうした私たちの深い心の傷を癒すには、矛盾と混沌を含む自分自身の感情を語ること、他者と自分への語りこそがアイデンティティの枠を越え、自分らしい生を可能にするということが強調された。また、講演の冒頭で、青年たちが四つの聖書箇所を寸劇で表現したが、聖書に自分を登場させることで、御言葉に照らし合わせた自分自身の姿にリアリティをもたせることができ、それまでの分団や講演を通して深めてきたそれぞれの「立場性」に立った信仰や、また在日大韓基督教会に集う意味について考えることができた。

午後は、「性の多様性」学習会がもたれた。はじめに全協として、同性愛者に対する差別をきつかけに、これまで活動し学んできたことが伝えられた。その後、

ビデオ「マイ・セクシャリティ」私の好きな性別」上映とアンケートを行った。この学習会では、多様な性に生きる人々の現実を自分が知ることで、自身のセクシュアリティを改めて考えてみることに目標が置かれた。自分の経験を踏まえた感想や進め方に対する意見など、今後につながる意見も交わされた。

夕方には、八・五(パトリオ)を共に覚えた。今年は、自分にとってのバリロを真剣に考えるプログラムが準備された。壁には、戦争に傷つく朝鮮民族や従軍慰安婦、在日、日本人の姿が、またその時代と共にあった在日大韓教会の姿が、そして未来を担う在日、ダブル、日本人の子どもの姿が、「過去・現在・未来」をテーマにプロジェクターで次々と映し出された。あまりにも過酷な映像に目を塞ぎたくなる場面もあった中で、歴史を自分とつなげ、現実の歴史を直視していく歩みによってこそ未来が拓かれるという思いが強くもたらされた。

●住所変更のお知らせ
○韓在文伝道師(神奈川平和伝道所 宅)
住所: 〒223-0101 座間市相武台二一九七-一
第三コーポ片野二〇一
号(電話: FAX: 〇四六一二五六一七〇七)